

(別紙2)

## 審査結果の要旨

氏名 湯浅 正彦

『カントの超越論的自我論 - 超越論的哲学の基礎に関する一考察 -』と題された湯浅正彦氏の博士号申請論文は、カントの第一の主著『純粹理性批判』を正面から取り上げ、カントの提起した超越論的哲学の成立基盤を精査し、それを、錯綜して展開されるカントの自我論にあることを、徹底して追求し、明らかにするものである。

第一部(「超越論的観念論との連関において」)、第一章においては、「自我」つまり「私」なるものは、有意味に構成された世界であれば、どんなに隔たった時間であれ、空間であれ、それを自在に行き来することのできる特異な存在であるということ、換言すれば、意味的な世界の統一(「すべての現象の総合的な統一」と「自我(私)」の統一(「統覚の必然的な統一」)とは、同一の事柄の両側面であることが、導入的に論じられる。第二章では、現代述語論理を先取りするとされるカントの存在概念が、伝統的な神との関係を断ち切って、人間、とりわけ「統覚(自我)」との関連におかれるということが、明らかにされる。そして、第三章においては、バークリの「観念論」が、また、第四章では、デカルトの「観念論」が取り上げられ、これらに対して、カント自身が展開した論駁論が明確な形で再提示される。これらの議論の核心は、「自我(私)」の存在は、「自我(私)の外の物」の存在を前提する、ということである。

第二部(「超越論的演繹との関連において」)の冒頭、第五章においては、「自我(私)」の自己同一性の内実が精査され、その際、目下のカント解釈上の重要課題である「自己触発」の問題が、「想起」という観点から解明される。また、第六章において、その都度成立する経験的な「自我(私)」を一貫して貫く同一的な「自我(私)」 - 「純粹統覚」 - の存在が、際だったものとして切り出される。さらに、第七章、第八章においては、D.ヘンリッヒの諸議論が取り上げられ、「純粹統覚」の存在の根源性が確認され、また、その「単純性」と「同一性」という二つの根本的なあり方が区別されて、多様な諸存在との関連性が明確にされる。そして、終章において、これまでの議論をふまえつつ、第一章で準備的に提示された「自我(私)」の統一と世界の統一との一体性の議論へと立ち返り、しかも、この一体である両統一の根底には、「純粹統覚」としての「自我(私)」が存すると結論づけられる。

以上の論議は、徹底してカント哲学に即し、これに内在的に展開されており、専門性が高く、充実したものである反面、ときに、カントの表現や論述に取り込まれ、晦渋になる面がなくはない。しかし、本論文は、いわゆる超越論的哲学の基盤とされる「自我」をめぐり、重要文献を渉猟しつつ、カントに基づいて徹底した精査を行っており、その点で、カント研究および自我研究という観点から、高く評価しうる。

よって、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判定する次第である。